

鳥語

57

2008

詩 評論 小説



鳥語社

鳥 57 語

2008年11月15日

目 次

詩

嘔

吐

片

戀

三浦玲子 2

小説

花びらの靴

木津奏子 8

鏡花水月の

岩田孝子 86

同人・会員住所録

85

編集後記

120

鏡花水月の

岩田孝子

一
茨木雪がひと月ぶりに『絃』のカウンターに坐ると、マスターはいつものウイスキーを雪の前へ置いてから、

「国際興業、つてごんじでしょうか」
と訊くのが案じ顔だ。

「……国際興業、というと、小佐野さんのですか」

「さあ、わたくしはまったくごんじませんで」

バアの名『絃』はマスターの以登太夫からとつてある。

以登太夫は常磐津の太夫だが三味線を好んで弾く。それがこんな顔つきをするのは、このせがれのために福山から漬物を漬けにきている母親のことか、三栄銀行の麻布支店にいる兄に関するか、いずれかであろう。しかし、以登太夫の母親が国際興業にかかわりのあるはずもない。

「健三さんが、何か言うてきはったんですか」

「おわかりになりましたか。どうもあいすみません。何んですか、そちらへ出向する、とか申しまして」

久慈健三は数年以前、麻布支店開設準備に単身で赴任したあと、そのまま支店長になって東京へ転宅した。

以登太夫の間わず語りから健三が最後の幼年学校生徒と知って、雪は、母の開く天ぶら屋『老松』へ招んだ。

自身が、中学校四年終了で陸士出の将校だったので、半

年のあいだとはいえ、幼年学校に籍を置いた者の口から、その實際を聞いてみたかったのだ。陸士の将校生徒は幼年学校出が多かったから、そんなことはいつても聞けそうではないが、窺うことは案外にむづかしかった。幼年学校出はしじゅう煽流風を吹かせていた。

自宅の二階は天ぶら屋、その階下に、母と雪とそれぞれ居間をとったばかりの小家だが、いちどきには、せいぜいが六七人の客をもてなす老松の、客筋は優良である。

久慈健三が在阪で瓦屋町支店長だったころには、一緒に弓を引きもした。弓とゴルフ半々が接待ゴルフに押されるのをこぼすうち、あつちへ行きつきりになってしまった。親友の岡野四郎が中之島の本社へ出張のついでに雪の内泊した翌朝、うちそろって京へでかけ、須浜町の弓師の手になる弓を久慈健三へ贈るべく、岡野に託したこともある。

「出向ですか。銀行からの出向は、たいていが経営面の挺入れ、それやったら国際興業というのが妙ですね」

「……と申しますと、」

ドアをあおつてはいつてきた客へ以登太夫は視線を投げたが、すぐに雪へ顔を向けた。客の接待には中年の女があたっている。笑顔よく、ばかでなく、身ごなしに魅力のある、絃になくてはならぬ女だ。

「三栄やつたら、国際興業はやっぱり小佐野さんとかや

と思いますけれど、そんなら、経営に心配なところはちよつともないはずですよって」

雪の頭に直ちに泛ぶのは、タクシーと不動産くらいたが、小佐野のことだから、社の定款には、営業種目として各種もれなく列記してあるにちがいない。どこの何へ手をのばすにしても、いちいち取締役会を招集、議決し、改めて書き加える手間が省ける。もつとも、よいかげんな付帯事項を記載すると、法務局の登記官は皮肉な言辭を弄し、また、株主総会では、営業実態の報告を迫られなどすることがある。が、小佐野に限ってその憂いはあるまい。

「小佐野さん、と仰有るのは、高名なお方でございますか」

「あのお方ですがな。太夫かてござんじでつしやる」

さっきの客はボックス席に落着いた。低声の会話が聞かれる心配はない。いや、聞かれてわるい話はせぬ。小佐野は、満州鉄道にかかわり敗戦後には陸軍の私下物資で財をなした男だが、話が小佐野に及んだとてたれの耳を憚ることもない。しかし、雪はその先は言わずに、もう一杯空けて椅子を起つた。

以登太夫は走書きのチェックを示した。主に東子のぶんである。雪が、少なくとも月に一度は絃の椅子に腰かけるのは、東子の呑みしろの支払いのためである。呑みしろ、といつても、さまでのことはない。

東子は、踊の相弟子や後輩とつれだつて絃へ来る。連中

は東子同様ふところに余裕がないから、銀主のついた酒に否やはない。妙な糸がついているのでないなら、なお歓迎する。やつてくるのは、舞踊会の前後が多い。

前、は稽古が深夜におよびがちで、気も吊っている。三人で来て、少量の酒と、ついでに軽食の出前をたのむらしい。

後、は緊張がほどけたうえに、興奮の余韻を残して妙に陽気になった連中は三四人より少々ふえ、口数多く酒量も増す。あそこはこうしたほうがよかった、こんどは長唄は東音会から呼んで気持よく踊りたい、などと、早くもつぎの舞台に話題はとぶが長居はせず、にぎやかに帰ってゆく。東子は亡兄の遺児だが、亡兄は藤田の父夫妻のもらい子である。つまり、姪の東子と雪とは血縁関係にない。それで、人は何ンとも言わぬが、雪は己れを律することに勞する。そうさせる事実が双方にきざしてひさしい。

二日ばかりおいて雪はまた絃の扉を押した。このまえ以登太夫の不審を不審のままに帰ったので、そのつづきを聞くつもりだった。いささか律義がすぎるやもしれぬ。

雪はカウンターの椅子に腰かけた。と、以登太夫がグラスを用意しながら、目遣いしてボックス席を指す。

東子が来ていた。かたわらに、章治の稽古場の兄弟子、もう一人、朋輩らしいのがいる。

「きようは愚痴の聞き役になってらっしゃいます」
以登太夫は東子を言った。

「佑藏くんが愚痴を」

「いえ、女のお弟子さんです、お名前はぞんじませんけれど」

首をねじまげての瞥見では、あの女弟子は雪に見覚えがある。名は、以登太夫同様わからぬ。

「良佑先生に叱られた、と……」

「叱られた。そんなことですか」

良佑の章治は、雪とおなじくらいに煙草を喫む。門人の踊っているときにはさすがにそんなことはないけれども、稽古が一段落すると、さっそく一本啜る。かたわらの小卓にその用意をしてあるが、たまに、切れたのに気づかぬことがある。すると内弟子が叱責を受ける。そんな不首尾のないように、女弟子は袂にピースをしのばせていた。

機会はめぐって、空の箱を章治がいまいましそうに投げたのを見た女弟子は、すかさず袂の一箱を差出したところ、案に相違して叱られた、というのである。

「せりふを言いますのやろ、舞台で。てまえ半月は煙草を断つのが新町のくせ、それを心得なしに勧められたんで癪癪を起こしたか……お弟子にしたら、割りの合わん話ですな」

しかし、あれで章治もだいぶ人間が穏やかになったのだ。

若いじぶんは、『五條橋』や『知盛』の稽古に使う、長刀がわりの檜の棒を常時身にひきつけて教授叱咤した。畳には滅多に坐らず、ただいま稽古する弟子のうしろへも、それをのぞむ門人をずらりと立たせ、同じように稽古するのをゆるし、むろん稽古人の邪魔にならぬようにさせるのだが、そのあいだを見回つては、かしこをびしり、こちらをびしり、という工合だった。それで、新町はよその三倍手がある、と評判になった。

良佑のところに限らず、弟子たるもの、煙草の一件くらいでは音をあげぬものだった。いずれ章治も、門人の機嫌をとりつつの稽古になるやもしれぬ。

『八段目』は、わたくしも並ばせていただくことになつております」

以登太夫は舞台の山台を言った。

「常磐津でしますのか、『八段目』を」

「はい、そのように伺いました。それで、コトバは立方なまかたに渡すように聞いております」

「ははあ。新町しんまちのせりふはそれでしたか。……ところで、このまえ訊いてはった園興業ですが、」

ボックス席の連中が席を起つてこつちへ来る。佑蔵がいちばんに気づいて雪に挨拶した。新町の稽古場へたびたび現れる雪を女弟子も見知つていて、振向いた雪へ佑蔵のうしろから目礼する。東子は、思いもうけず雪を見たのにお

どろいたようで、今晚は、と低声に言つて、みなより先にドアを出た。

藤間良佑はこの男を、すぎさん、などと呼ぶが、名は、茨木、である、というふうに着古場の連中は理解している。東子が新町の弟子になつてから二十年近くが経つけれども、東子の叔父である、と正面からは明かさずにきた。幼友達の章治の良佑はむろん承知だが、それをまわりへ知らせることはない。しぜんに知れるのまでもを妨げようとは思わぬが、わざわざ、われから言うつもりはない。

東子も心得て、叔父さん、とはついぞ呼ばぬ。もつとも小学生のころから、囲りの者同様、すぎさん、と言いならわしている。

「おそれいます、お心をわずらわせまして」

以登太夫は風袋なしにそう言つと、傾聴する姿勢になった。

「いや、何がわかつたというのやあれしません、ひよつとすると、出向からもうひとつ転じて、あつちの社員になりはるのやないかしらん、思いました。社員、いうても高級な。何かそんなことをお聞きやおませんか」

「やつぱりそうですか。お給金がだいぶ増えるとか、嫂が申しておりました。でも、あそこは、よろしくない噂がありますとか」

「どんな噂です」

返答は予想している。

「何んですか、闇で儲けた会社ですか」

「闇ですか……陸軍の払下げはあったようですが、闇というよりはもうちょつと堂々としたもんやと思つてはつたほうがよろし」

商議所会頭の五大友厚なども、北海道の地面を格安で払下げを受けた。三井や岩崎という政商は、程度の差こそあれ、みな、それである。一応の落着きを得たのちに信義やの社会的責任やのを言いたてる。

「小佐野さんも、飛抜けての悪人というのでもない。健三さんのお持持でおしやすなら、それでええのやおませんか」
どのみち他人のことだから冷淡な判断、感想になる、
と以登太夫はとつたやもしれぬ。弟の以登太夫でみれば、兄は一流の大銀行の行員のままでいてもらいたいのである。

「得心いたしました」

「そうですか」

「茨木さんのお言葉ですから」

雪はなにやら、話をあやまつたような心地になった。

二

四郎と春洋と雪と、三人そろつた中へ東子^{はるみ}が加わるのはこれまでなかったことだ。

京町堀^{きやうまちぼり}の二階の老松は、僅々六七人を接待するお座敷天ぷらで、畳の一部を落した掘炬燵式の客席が白木のカウンターを開むが、席のうしろはおよそ十二畳分をあけてある。三四人ぶんの夜具はのべられる広さである。

その畳へ四人は車座になった。

岡野四郎は、娘の婚礼に來阪した。娘の相手は京の人間である。伏見^{ふし}の御香宮神社^{ごかうみやうじんじや}で式をあげ、近くの料理屋で披露のあと、出席した雪について大阪京町堀の雪の宅へ顔を出した。

四郎の妻女と妹娘は京の宿をひきはらい、京見物もせず
に帰京した。それについて雪も聞くところはあつたが、妻女と四郎と双方に同情するあんばいで、妻女を一刀で両断して四郎の溜飲^{りゅういん}をさげさせるには至らぬ。

一方、多春洋^{おほの}は、このまえ雪が藤田の母に呼ばれて夙川^{しゆくがわ}の藤田宅を訪れたおりに、樂家^{がくけ}の多を新設の事務所に迎えた
と知つた母が、ぜひに多春洋の横笛^{よこふエ}を聴きたい、とねだつたことを言うと、それなら明日にでも奏してお聞かせしよう
と気散じな返答をして、とりあえずはこれも京町堀へやつてきた。

東子は新町の、章治の稽古場へ出たあと顔を見せた。藤田は東子の内だから、どうせなら同道しよう、というのである。べつに、多春洋に興味があるらしい。きたの真砂町^{まじりまち}に稽古所をひらく花木練扇^{はなさいせふ}という踊り手を、花木流から離

して本名の神田一子に返した張本人が多春洋である、と章治の藤間良佑に聞かされてから、東子は内心羨望を禁じえぬふうだ。

じつは神田一子は踊をやめたのではなく、東子も踊を遠ざけたいのではない。そんな荒療治で花木の家元をひきはがした熱情の持主を、じかに確かめたかったらしい。

日の高いうちならきょうしかない。四郎は火曜日まで余裕があるらしいが、雪の事務所は平常どおりに明日は開ける。よんどころない用があれば抜けて抜けられぬではないけれども、雪と多と、両方がそうするわけにもゆくまい。

雪は、多に浚えてもらって己れも何か吹く心でいたから、四郎の娘の婚礼披露宴に招待を受けた返信に、別封でこの次第を書き送った。藤田の父が歿つて葬礼の前夜祭に四郎はかけつけて龍笛を奏し、一年祭にも供えてくれる。

このたび結婚した四郎の長女は、名を、笙子、という。四郎の得手は龍笛だが、まさか龍子ともつけられまいからね、と笑つたのを思い出す。

たれがなにを奏するかは多春洋の指図にまかせる。

楽家は本来、笙、簫、笛、という管のすべて、大太鼓、羯鼓などの打楽器、琴、琵琶にいたるまでの演奏は申すにおよばず、舞楽もこなすのが本来である。多春洋に問うと、「笛ならどうやらこうやら、などと頼みした。わざわざ、

笛なら、と言うのから察すると、龍笛も高麗笛も神楽笛も得意ではあるらしい。曲の大方は、龍笛の音頭で始まる。「多さんおひとりならべつ、われわれが加わりますので、吹きやすい曲でお願いしよう、と思いますけれど」

雪は多の意圖を訊いた。

「そうですね。『風踏』なんかはいかがですか、『春鶯囀』の、『春鶯囀』は『天長宝寿楽』ともいうて、そら、管弦はみなめでたいものですけれど、御長寿のお母さんにふさわしいと思います」

「はあ。もうちょっと簡単なところはどうですか」

「なるほど。いや、なまじなものより、初歩に稽古するようなんをきちんと奏するのが、お聞きいただくお母さんに失礼がない。だいいち品がよろしい」

多は楽家の人の顔になった。

「……『陪臚』にでもしりますか」

「『陪臚』ですか」

雪はテルレイラア、チラレイエ、と簫の唱歌を低声に口ずさんだ。口ずさみながら四郎を見ると、

「ほく、憶えてないよ『陪臚』は。二三日もあればべつだが、なにしろきょうがきょうなんだから、いろはのい、にしてくれ。……そう願います」

と言つて、三人そろつて奏するのは『五常楽急』ときまつた。雪もこのほうがよい。これなら『陪臚』の三分の二

の長さだ。つまずくおそれも少なからう。

じつは四郎は雪に助け船を出したので、四郎が『陪臚』あたりを心得ぬ道理はないのである。

楽器の受持は、箏箏を雪、龍笛は四郎、多は笙を吹く、ときめ、その場で打合せた。曲がいろはのい、だけあつてすぐにおわつた。そのあいだ、東子は、男三人のやりとりを聞き、『五常樂急』を聴いた。

老松のカウンターにならぶのは奏樂のあと、引返してから、ときめてある。

日曜日は休むのを、揚げ方の千枝に無理を言つて下拵えをしてもらった。カウンターには四客分、ダマスク織のナブキンも用意した。

お座敷天ぶら老松の開業にあたつて、雪の発案でこういうことにした。二人連れの客の片方はいが女客と予想して、たとい天ぶら屋でもナブキンは欠かされぬ、と判断した。

ナブキンじたいが好評というほかに、隅にくく小さく、散り松葉をぬいとりにしたのが客の目にとまり、ときおり、譲つてほしい、と請われることのあるほどに、好評である。白地に白糸のぬいとりに気づく客は、やがて老松の上客になる。

一流のフランス料理店を除けば、ナブキンの用意のある店は、まだ珍しい。洋食屋は、むろん、例の、ナブキン折

りましましたたましまよ、と歌謡曲にある紙ナブキンである。女客は自前のハンカチを膝にひろげるのがつねだ。

一同は階下へ降り、夙川の藤田へ出るべくそれぞれの履物に屈んだ。

乗込んだのは多のグロリアである。ほんとうは多のものではなく多の叔父の持物だというが、あるほうがよい、というおりには、必ず多は乗ってくる。ほとんど好きにしているように見える。失敬して、とことわつて雪が助手席を占め、四郎は東子とうしろへならんだ。

雪が自分のプリンスを運転し、四郎が横に乗った、とでもいうなら、話を聞いてもよい、とは考えていた。しかし、きょうが初の顔合わせの多と同席で、しかも前後にわかれてでは、話は、枕をならべての蒲団によこたわつてからになろう、と思案した。

ところが、自動車幹線道路をそれてしばらく進み基督教会のまえへさしかかったとき、四郎のほうでうしろから、あの事情に触れてきた。もう四五分で藤田に着こうかという近くまで来ている。

「相手の男……笙子の婿、新郎、というやつだが、瀬川丑松なんだ」

「……せがわ、うしまつ、」

雪はとんと小説は読まぬけれども、それが藤村の小説『破壊』の主人公、くらしいの知識はある。

「それで揉めに揉めてね。心中もしかねまじい勢いにつまりは負けたんだが」

「京の男、と聞いたけれど、八瀬童子か」

八瀬童子は、往古から天皇家の葬礼に奉仕する。大正天皇薨去の際にも東京へまかりでたはずである。奉仕する人々には特別な誇りがあるう。

八瀬といえば、釜風呂があつて喜鶴亭なる料理屋があつて、と思ひ起される。道すがらの公園は細長い地面の小規模なもので、背の低いすべり台やぶらんが見えたが、人の住む家から離れてまわりは樹木ばかり、こんなところでたれが遊ぶのか、と思わせたものである。

八瀬童子の名を出しはしたが、八瀬のどのあたりに棲む者を指すかは雪も知らぬ。

「そういう上等のじゃない。いや、上等も下等もないが多春洋も東子も口を挟まずにいる。うしろとまゑとで雪も勝手がわるい。」

察するに、この婚姻をよるこばなんだのは、四郎ではなく四郎の妻女であるらしい。といいながら、四郎も、両手をあげて賛成したのでもなさそうだ。

「喋々することじゃないが、聞いてもらいたいんだ」

「聞かせてもらおう」

自動車は女子高校の裏手を過ぎ、雪の案内で角を曲がると、藤田の家の生垣が見えた。やはりこのつづきは、京町

堀へ戻つてから、寝間で、寝酒でも呑みながらになる。

思てたより早う着きました、と言う多へ雪は運転をねぎらい、降りようとしたところへ向うからタクシーが来て、

藤田の門先で停つた。

降りたのは妹の怜子である。

藤田が大阪淡路町からここへ引き移つたのは、妹婿の安原の斡旋による。

怜子は雪一行が目に入らぬげに足早に門をはいる。

「いとちゃん、」

雪が呼びかけると振返つて目を見ひらいた。

「すぎさん……。もう来ておくれやしたん」

「いとちゃんも呼ばれてはりましたんか、お母さんに」

怜子は一二歩あともどりし、ステッキを握つた雪の手へわが両手を押しつけた。

三

人の死ぬのを何度見てきたか、雪はいまさらに指を折つた。戦場の死ではない、敗戦ののちの、家族や知り人の死である。

章治の母親が死んだのは、章治の藤間良佑が東京の舞台で留守のあいだだった。厳密には死水をとつたことにはならぬけれども、息をひいた直後にその枕頭に立つたのは雪

である。病院の受付係が良佑のひいきで、後始末も懇篤だった。すぐに新町の、まだ『ふぢ田』の軒灯で茶屋を営業していた内へとつて返し、入院費を立替えて支払い、東京の章治へは、大阪へ電話せよ、とことづてをした。

葬礼の晩、章治は、みなが引払ったあとに残った雪を置いて二階へあがり、喪服を着更えようとする女房にむかつて離婚の意思を伝えた。離縁を言渡したのである。門弟を、われからのぞんで妻にしたのだったが、章治の母親とのあいだが、当初からうまくなかった。愁嘆場は遠慮する、と雪は言ったが、二階の首尾は静かなものだった。以来章治に、艶聞らしい艶聞もない。

それより以前に、長兄の忱が死んでいる。藤田の父母夫妻が貰い子をして長子に据えた忱は、東子が七つの夏に病死した。白浜の旅館の一室にながらく出養生の揚句である。仲の良かった次兄は戦死した。戦場へ赴くのが任務の雪とちがい、次兄は研究室から戦地へ拉し去られた。

藤田の父は歿る数年前に胃の別出手術をうけているが、死因はべつにある。父の死は、風よけの衝立がとりはらわれたような頼りなさを雪に覚えさせたものだった。東子の将来を藤田の父は雪に託したが、それでなくとも、父と祖父とをなくした姪の行く末には、関心があり責任がある。

藤田の父の死で、東子には代襲相続の権利が生じたけれ

ども、雪は相続権を棄てて、東子の取りぶんを少々上積みした。本来は庶子の雪は、藤田の父夫妻の思わくで、夫妻の実子になつてゐる。相続権というのも、その半分は、民法に照らして不当に与えられたのである。

相続権を放棄しよう、というのは、藤田を出て生みの母の養子になった日に、きめた。母の養子になり、母と新町で暮らしたい、という申し出を、一旦は怒りを発しながらも、藤田の父は赦した。雪は、たいていのことは諸く心になった。

このたびの、藤田の母の死について、くわしく話して聞かせる者はない。臨終の様子はたれも知らぬのである。医者に見立ては老衰による心停止というが、病床に身を養つてのゆるやかな死ではない。

嫂の時子が、例によつて茶の稽古から戻ると、母は座布団を枕に横になつていた。庭に面した、母が居間になっている八畳である。障子は、廊下をへだてた硝子障子ともども、開放つてあつた。

膝をついて帰宅の挨拶をしたが返事がない。低声にすぎたかと少々声を張つても姑は黙つたままである。うたた寝なら起こさぬのがよい、と思つたが、うたた寝をする人ではなかつた。正面へまわつたときには、時子の耳に自身の動悸が騒がしかった。

急ぎ往診を請うたという医者には雪に馴染みがない。その人間が信用できるか否か、ともかく藤田の母は頓死にはちがいない。

藤田の家には家政を助ける女が二人いたが、父が歿してまもなく二人ともにひまを出した。時子が、姑と東子との所帯くらいはまわしてゆける、と覚悟を見せたのである。来客らしい来客もない。

しかし、やがて、週に二日の割合で安原から人を起こすようになった。安原宅は、歩いて五六分の近さにある。一日べったりいるのではなく二三時間のこたらしいが、これが時子の助けになった。そのかわり、時子でみれば、伶子や安原に多少の負担はおぼえたであろう。らくでのんきで、というふうに、両方満たされることは滅多にない。

藤田の母の頼みで多春洋と岡野四郎とを伴ったのだったが、依頼者がもはやこの世の人でないとすれば、あのまま引返してもらうほかはなかった。その枕辺で約束の楽を奏するほど、雪は沈着でなく、さりとて感傷に傾かず、多と四郎も、家族血縁の中へとどまらせるまでには母と親しんでいたわけではない。通夜や葬礼には顔を出すにしても、である。

その両方へ、多はともかく、四郎に列してもらおうわけにはゆかぬ。娘の婚儀で休暇をとってまなしに、あるいはひ

きつづいて、己れの母の弔いではないのを、二三日も社業を休みもなるまい。

したがって、前夜祭にも、葬礼にも、四郎の奏楽はなかった。

藤田の父の死に際して、四郎は東京から馳せつけて龍笛を奏した。母のときにはそれがなかったのは、雪が母を軽んじたことになるのであろうか。

そんなことで、聞いてもらいたい、と言っていた四郎の家庭の事情には、耳を藉さずにした。

車中での隻語で、そのあらましには察しがつく。

四郎の妻女がとりわけて権高というのでもあるまい。家格の劣る相手との縁組がおもしろくないのは、ひとり四郎の妻女に特別な反応ではない。愛娘の結婚相手となれば、家で膳たてしたのでもない限り、ひとくち難癖をつけたくなるのが親のつねである。たとい丑松でなくとも、たれを連れてきても、不満欠点はどこからでも捜しださずにはおかぬ。

世間にふつういわれるのは、花嫁の父、の理不尽である。花婿候補者がどんな褒められ者であろうと、娘の父親は必ず非を鳴らすことになっている。

しかし岡野の場合にはちがう。娘当人と父親とがその気持を固めているにもかかわらず、母親のほうがぐずぐずとい

つまでも認めなかった、と聞いた。披露の席に連なった雪の目にも、四郎の妻女は終始不機嫌だった。四郎は、たとい相手が丑松だとて、それを理由に故障を入れる男ではない。結局、己れの考えは容れられず、娘の意のままの縁組を呑んだ母親は、やはり男親より弱い立場だったのか。

いや、むろん雪は、この帰結をよろこぶけれども、先へいって、母親の意見にもつと耳を傾けるべきであつた、というような事態に立ち至らぬとも限らぬ懸念はある。妻女の心情にまったく同感できぬのもないのである。

根本をいえば、水平社の理念も理解できる。

先年、兵庫八鹿で、新聞が幾日間にもわたつて記事にする事件があつた。雪が知つたのは事件が終熄をみてからだが、じつはその以前数年というもの、共産党と水平社の攻防はくりかえされたのだ。

共産党、というのは地元的高等学校教師であり、水平社は生徒の父兄である。この両者は、銃や刀こそ持たね、棍棒や旗竿をえものに、殴り殴られる騒動を起こし、怪我人を出した。警官が出動し、裁判にもなつた。いずれが是とも判断のつきかねる、いたみわけ、ともいうべき、五分五分の渡り合いだったらしいが、両方から、賠償請求が出た。

雪は、藤村が『破戒』を著した時代を思い起した。もう、どれほどの昔になるであらう。七十年は経つのではあるま

いか。それでも、徒党を組んだ八鹿のような騒ぎがあり、四郎の妻女は、おとなしく夫と連れだつて帰京するのには、不平を鳴らした。式には、いやいや顔をならべたのである。共産党といい、水平社といい、何んと魅力のある、ゆかしく、うるわしくも力強い名であらう。

雪は思い返すのだが、少なくとも雪の知る聯隊では「水平」だった。丑松であれ旧士族であれ、その扱いに隔てはなかつた。営舎の食事にも区別差別のないのをよろこび感泣する兵がいたのは、軍の外、一般社会では、まだ四民平等の実現が遠いところもあつた証しである。

軍隊に、すべての差別がなかつた、とは言わぬ。雪が味合つたごとく、将校のあいだでは、幼年学校出と中学校出とに、隠微な差別とあからさまな区別がおこなわれていた。が、それは、どうにも動かせぬ事象ではない。幼年学校といい中学校といい、みずからがのぞんだか親の意思かは知らず、いずれ選択したのである。

岡野四郎も中学出だったが、とかく僻んで考えがちの雪とはことかわり、むしろ誇つてさえたかに眺められる。

敗戦後の占領が解かれぬうちから、いろいろな人が戦時の記録を書いた。ある人は参謀を論評し、ある人は記憶の司令官に批判を加えた。ほかのたれにも言わぬが、四郎とは、そんな話に及ぶことがある。だがね、と言ひ、それがね、と四郎は言つて、そういう出版物でも名將の冠が被せ

られているのは中学出が少なくない、と雪の齋を散じるのである。

陸士十九期は、全員が中学出身である。その年は中学出しが採らなかつたのだ。さだめて理由があつたにちがいないそのわけを雪は知らぬが、敗戦ののちに、しみじみと思ひ出される将官はこの期の人が多い。今村均、本間雅晴、河辺正三、田中静香などという人を四郎はあげた。

幼年学校では露語や独語を教える。一方、中学生は、英語を履修する。陸軍士官学校へはいつてからの両者の対立は、そんなことから始まつた。陸士十九期は、対立せぬのである。英語の下地があるという条件も加わつたか、駐在武官として出る先はたいがい英語圏だつた。英国、米、豪州、などである。

岡野四郎の娘の結婚相手にはじまつて「名将」にまで連想が及んだところへ、書籍小包が届いた。差出人は、宛名の筆跡でそれと知れた岡野四郎である。

ものものしい荷造を解くと、立派な装釘の書物があらわれた。菊版の朱色の布装は服部卓四郎著『大東亜戦争全史』と箔が押してあり、厚み一寸ばかりの大著である。

四郎の送状は翌日午前の便で届いた。小包に信書の同封は禁じられている、それをまもる四郎の律義を雪はちよつと笑つたが、じつは雪もそうしている。

四郎の案内にあるとおり、『大東亜戦争全史』は昭和二十八年三月の刊行で、目のまえにあるのはその復刻版である。発刊されるや、いわゆるベストセラーになつたが、雪は当時読む気にならず、藤田の父や安原の話題にものぼらなかつた。早い話が、暮しに社業に、身を砕いていたのである。

その前年の暮れに服部は公職を退いている。服部の公職とは、復員庁史実調査部から横すべりした復員局資料調査部長と、兼任の、GHQ歴史課勤務を指す。

敗戦の翌年聯合軍の指令で単身復員した服部は、ただちに右の職についた。GHQ歴史課に席を置いたのは、ウィロビー將軍に重用されたゆえ、と噂された。

服部卓四郎が、さきの大戦をどのように総括、反省しよう、昭和六年に参謀本部にはいつてから二十年の敗戦まで、いっぺんも前線に出たためしのない男に、どうも雪は信をおきかねる。東條のそばにいて、開戦時は作戦課長にまでなつた。ふつうに考えればBC級戦犯というに躊躇はないはずが、「前線に出たことがない」のが有利にはたらいで、戦争責任は不問に付された。

食うや食わずの日々を送る人間が、折から占領する米軍に職をもとめるのは、まったくやむを得ざる行為であらう。ウィロビー將軍の信任厚かつた服部は、米国の禄を食むに当たつて、心に葛藤がなかつたか。あつたにせよ、GH

Qにいた事実がすでに腹立たしいので、これを説もうという気にもなにくいところを、四郎の手紙は、無理にも読め、と勧める。どんな嘘をどういうふうに書き、しかも恥じぬか、

御用繁多と拝察致し候へども一日この書のために

御割き候はばかの負け戦の拠つてきたる所以にも到る心地に成らせたまふべく存じられ候間笑止の仕業を省す御届申上候

まあ、ちよつと、読んでみる、と言つていた。

四

朝の洗面のあとに髭を剃るのは、今のように事務所を持たずのんびりした仕事に日を送つていたじぶんからの習慣である。かくべつ面倒とも思わなかつたが楽しくもない。それが、この刷子によつて快楽に変じた。刷子のことだから快楽は剃るにあるのではなく、そのまえの段階、泡立てた石鹼を髭にぬりつける手続きにある。刷子の、柔らかな中にひそんだ弾力が心地よい抵抗感を伴つて肌に当たり、盛上がった泡はメレンゲのように形を保っている。

その上質をよろこぶのではない。

いや、上質はむしろありがたいが、刷子は、東子がもたらした。どの店のどの品がよいか、心当たりの男どもに訊

いて手に入れたらしい。

「使てくれはりますか」

東子は、重さをはかるように手にとる雪にそう言つた。

「使わんとどないします。だいぶ上等らしい……」

「穴熊、の、毛工です」

それまで使つていた刷子も捨てるのは無残に思われたので、じゅうぶんに乾かして箱におさめた。

これまで、外で人に会わぬ日は髭剃りを省略することがあつた。きょうは日曜日のことで一時間ばかり朝寝をたのしみ、それでも髭は剃つた。四時をまわつたいま顎に指を当ててみると、やはりざらついている。事務所に二人いる事務員のうち女のほうが、ファイブオクロックシャドウなどと言つたのを思い出した。

雪が、髭をあたると言う習慣のないのは、そも「髭をする」とは言わぬからだ。「する」と言う土地は、縁起をかついで反対語の「あたる」を使う。博打でこれだけ「すつた」と言うが、競馬でこれこれぶん「そつた」と言うこととはない。そういえば関東地下の人は、「する」を「する」というに似て、「ぶらさがる」をも「ぶるさがる」というのが癖だ。

岡野四郎も「あたる」というのを思い起しながら、髭を剃つた。

会場の大坂屋証券ホールへは、南側の三越の、茶房で待

合わせてはいった。逢うなり東子は雪のおとがいへ人差し指を伸ばしかけ、伸ばしかけただけですぐにひっこめた。その手をとってわが手に持ち添え、動作のつづきを……、という衝動に雪が駆られなんたのではない。

「穴熊刷子、毎日使えます。なかなか工合よろしい。きようは二遍使いました」

己れで頬から額を撫でた。

会場の扉を押すと、手近の椅子にならんで腰掛けた。二時から始まっているので、すでに六七番がすんでいる。なにも勉強だから、と来は来たけれども、番数のすべてを聞くのは退屈だろう、と雪のほうで夕刻の待合わせにきめた。もともと、胡弓の演奏会というのが滅多にない。聞きたからといっていつでも聞ける状況にはない。この機会にたつぷりと聞いておくのがよいのである。

げんざい「三曲」というと、箏、三味線、尺八での演奏が主で、本来胡弓であるべきところへ尺八のはいるのが当りまえになっている。きようは胡弓の会というだけあって、逆に、もとは尺八の曲だった『八千代獅子』も、胡弓できれいにさめてある。

大阪系名古屋系とはべつに「藤植流鼓弓」と見なれぬ文字が番付に見えるのは、徳川期の胡弓の名人藤植検校考案の四絃胡弓を用いる曲らしい。分ければこれは東京系になるうか。藤植検校は江戸麴町に住んでいた。

四の絃は三の絃とおなじ高さに調弦する。半音または一音がええた勘所を押さえると、これが不協和音になってえもいわれぬ味合いになる、というのが、話には聞いても実際に耳にした経験がないので、雪も興をそそられた。打出しのただ一曲、地歌の『松竹梅』がそれである。

席についてすぐの演奏は『有馬獅子』だった。大阪の峰崎勾当の曲で、ごく短く、じきに終わった。

「『東獅子』も峰崎勾当でしたかしらん」

東子は雪へ顔を向けた。

「峰崎勾当は、そら、いろいろこしらえてはる。たしか『越後獅子』もそうですし、歌ものやったら、むろん『雪』も『こすの』もそうや、いうのは、東子ちゃんかてござんじですやろ」

峰崎勾当のものでは『残月』が雪は好きで、妹の伶子にとくべつに箏を弾いてもらいなどもした。内容は、門弟だった大家の娘の夭折を悼むものだが、曲は意外に華やかにできている。そこが、かえって哀切なのだった。

踊とちがつて幕間というほどの幕間もなしにつきつぎと番組はすすみ、興味の的の『松竹梅』の幕が明いた。胡弓は会主の所持だが、三絃は菊茂検校が弾く。菊茂検校は、うち見たところ八十に手が届こうかという年輩、演奏まえに会主はその大先輩に一揖したその一揖が、一揖でありながら、鞠躬如とした会主の心持を、胸に迫るように聴衆に

さとらせた。

雪はそれにうたれて四絃胡弓に耳をかたむけたが、げんざい藤植流鼓弓が絶えたも同然の事実に得心がいった。その技巧はあまりに難しく、また、その部分をとりかけたとしても、さして曲趣がそこなわれようとは思われぬ。

藤植検校の裔の会主は、義務でもその技巧をつたえようとするのやもしれぬけれども、それは会主のこころゆかせである。聴衆が表明する一応の感服は、先祖を思い芸を思う会主の一途さに対してであつて、『松竹梅』に加えられた四絃胡弓の効果へ向けてではなからう。

藤植検校がどういふ経緯でこれの考案に到つたのか不明だが、演奏家は似たようなことをころみるものだ、というのは、箏曲家の宮城道雄は、十七絃はおろか二十何絃という長大な箏を考案演奏している。門人に伝授はしても、使いこなし、その特長を特長たらしめる者は、宮城道雄当人のほかにはついに現れなかった。技巧の難易がそのまま効果として芸の上にあらわれるのはまれである。それでも実演家は、芸の至難に持みがちだ。

きょうの切符は恰子から回ってきた。敗戦後に安原と結婚すると同時に箏の稽古は沙汰やみになっているのを、老齢の師匠の息災のあいだは、と言ひ、盆暮れの挨拶はしている。そんなことで会の切符が届く。

といって雪がわざわざ楽屋を訪れて、たれに挨拶せねば

ならぬものでもない。

会が果てると雪は東子をうながして外へ出た。

ちようどそんな時刻でもあり、東子をまえにひとくち呑み、ついでに晩飯を食つて帰りたいところだが、あさつては藤田の母の五十日祭にあたる。十日ごとに夙川に参じて祭詞を奏するうちにも、とりわけて五十日祭は大切な日である。当然に東子も席につらなる。そのあとは百日祭まで仕うまつることもない。夙川の、藤田へ出向く用もないのである。

タクシーのシートにならんでから、四絃胡弓について、感想を訊いてみた。

「何んやしらん、むつかしそうで、ややこしそうで、」感想、を言うのもむつかしそうだ。

「いや、それは、演奏の仕方ですやろ。そやのうて、曲の感じはどないでした」

「ふつうの『松竹梅』と、あんまり変わりはないようにも思いましたけれど」

東子は正直なところを言つた。が、すぐに言いなおした。

「いえ、耳が、すぎさんほどええことあれしませんが」

「わたしも場数踏んでるだけで、耳がええ、ということはない。その証拠に、東子ちゃんとおんなじ感想です」

雪が笑うと東子も笑つた。

阪急梅田駅で東子を降ろし、そのうしろ姿が人ごみの中にまぎれるのを雪はタクシーから眺めた。

藤田の母が歿したあと、東子は夙川の家で母の時子と二人で暮している。藤田の家は、女二人ばかりの所帯になったのだ。

五

五十日祭の祭詞も、安原隆弘が奏上した。怜子を通さず直接に雪が頼んだのである。雪は、生みの母の養子になつて久しく、茨木姓をなのりもしているのを理由に、このたびの諸事は遠慮した。父のときも事情は同様であつたのを、藤田の母が強いてのぞむのにまかせ、前夜祭から祝詞を奏上したが、こんどは、それなら誄詞を奉れ、と安原のいうのも辞した。

おもかげをおもひうかべてしみじみと ゆきにしひと
をしのぶけふかな

などと、おさなりを奉つてもしようがない。さりとて、参集したゆかりの人の胸へ沁みいるような誄歌は、雪の筆先からは出そうにない。その心に欠ける、とは思わぬ。心はあつても、やはり技巧が要るのである。

五十日祭のあとの雑談に、万国博覧会の話が出た。

春に始つた博覧会は開会直後からたいした人気で、九月

まで半年間の会期だから頃合をみてゆつくりでかけられそうなものだが、春休みにはいると、遠いところに住む若者が縁をたよつて親類の家へやつて来る、という。二日や三日は逗留し、そこを足場に会場の千里まで通う。

うちにも明日から学校行きが三四人来る、と怜子がちょっとうれしそうに言つた。

安原の甥とその友人で、広島の高校生らしい。怜子の子は、この春大学生になつたのと高校生との、いずれも男児だから、安原の甥などがやつて来ても、その扱いにとまどうこともないのである。

「こんな時候やし、奥の間へお蒲団の四五枚も敷いて、皆で雑魚寝させよ、思てますの、うちの子らも一緒に」

「そら、よろし」

「御飯も、量をたつぷりにしといたら、それで大方すむよろし。食べるもんの好き嫌いはない、と聞いてますさかいに」

雪は妹を頼もしく眺めた。時子なら、無駄にこまごまと気遣ひして己れでくたびれるだろうが、さいわい藤田の家へは、たれが宿をしてくれとも言つて来ぬようだった。

明くる日雪は、新町の章治の戸口へ自動車を駐めた。鍵のかかつていぬ格子戸を開け、ステッキをたてかけ靴をぬくと、いつものように稽古場へとおつた。

この四五日うちに、四花街寄り寄りの踊が、場所も博覧会会場で上演される、と聞いている。

章治は雪の顔を見るなり、

「万博へ行ってきました、きのう」

と言った。

「何んやかやで、うちもお稽古は休んでます」

章治は、それでも自身の稽古はしていたと見えて、明石か何かに白地献上の帯を締め、両の手に、開いた扇を持っている。

舞扇を片づけての話に、各国バビリオンの新奇なこと、とりわけてアメリカ館の月の石は大人気で、見物の順番がめぐってくるには、待つこと二三時間は覚悟せねばなるまい、などいう中では「人間洗濯機」が雪の興味をひいた。

支那の「人間燭台」は、人間をして蠟燭立てにかたちづくり、実際に燭を点すのだが、三洋電機出展のこれは人間を洗うものらしい。水着姿の笑顔よしの美女が、心地よげに洗われる様子を説いた。

博覧会は八百円もの入場料をとるので、会場内は何んでも見物できるかといえは、そうでもない。

万博ホールは、その催し物によつて、かねのいるのと無料のことがある。有料のほうの舞踊会「華扇会」に章治の藤間良佑が出演するのは、ついこのあいだ新町の稽古場で当

人から聞いた。九月のはじめ、というから、会期もしまいがたのあたりになる。

べつに、六月の末には、

「お家元がお越しになります」

と、これは東子におしえられている。

「家元、松緑さんが、」

「はい。『新曲』か何か、長唄のお出しのようですね、れど」

俳優の尾上松緑は、藤間流家元の名を勘右衛門といい、所謂永代橋の宗家勘十郎とは別派になる。『新曲』とは、明治の新曲『新曲浦島』の、冒頭の一部を指す。当日は「日本の日」を称し、武原はんや吾妻徳穂の来演もある。踊のまえには、先行芸能として能狂言が演じられる。

武原はんは疾うに妓籍をはなれ、ひとかどの舞踊家になりおおせたが、東京在住の岡野四郎によれば、新橋へ移った当座は、かげでもひなたでも相当にいじめられたらしい。上方からの人に意地悪するなんて、そんなことが知れば新橋の名折れじゃござんせんか、と口はうつくしいが、いじめられたのは衆知だという。当時少年の四郎の実見し得るべくもないのに承知なら、やはり衆知の事実なのであろう。

京祇園町では舞は井上流の独占だが、ほかの土地ではたいてい、検番指定の師匠をたのむ。新橋は花柳流と藤間流

西川流らしい。

武原はんは現在、師匠もなく弟子もとらぬ、行うのは武原はん流ともいうべき舞である、など人とも言ひ己れも認めてゐる。それを、輪郭はそうでも、中身に西川鯉三郎の色が濃くしみついてゐるのは、ちよつと眼の明いた者なら見落とさぬであらう、と沙汰する。

そう指さずとも、手ほどきにはじまつて年月稽古にいそしめば、水や肥やしの恩を受けたのが実を結んでふしぎはない。

はんの場合でいえば、吉村の舞に花柳の踊がある。

はんは宗右衛門町大和屋の抱えだつた。結婚した青山二郎とは三年ばかりで別れ、新橋で二度目の棲をとつた。女将が大坂出身の大茶屋の金田中や、灘万の引きで出たのだ。料理屋も待合も、戦争前から、大阪人の手になる家は新橋に少なくない。

新喜楽は伊藤博文や山県有朋を顧客にした家だが、敗戦後に、それと同等の格式として加わつた金田中は田中家の分れで、田中家の女将は大坂北陽の芸子だつた。おなじく大阪からの灘万は、西園寺がひいきにしている。

それからは、新橋に稽古にはいつていた藤間や西川の踊が、下地へ加わる。

どれといわず、はんの舞を磨くに力あつたうち、とりわけて、はんは、西川の踊、というよりは、鯉三郎の踊に魅

力を感じたために、より強く影響を受けたのであらう。

各界にはんの信奉者は多い。新橋の花街にいまもつてそんなことを言わせるとは鯉三郎は大した舞踊家だが、その踊を自家薬籠中にした武原はんもえらいもんやないか、と雪がはんの肩を持つと、「いけず」は京の専売でもないからね、と四郎は笑つた。

「月の石、いうのは、章ちゃん、見物したンかいな」
雪は烟草を啜えた。

「ごんじないお方はこれや。いまも言うとおりの、二、三時間も待ちますねんで。そんな辛抱ができますかいな」

内弟子の少年が紅茶を淹れてきた。たれが命じたのではないのを、気配で雪の来ているのを察し、片づけものの手をとめたのであらう。稽古中には煎茶のほかは出ぬが、雪の紅茶好きを知つていて氣を利かせたのだ。

紅茶を好むのは、藤田の父の影響である。藤田の父は、ひるすぎになると毎日のように姿をみせ、幼い雪を母の脇からその膝へ抱きとつて好みの紅茶を嗅み、日の高いうちに淡路町の本宅へ帰つてゆく。膝の上で見上げる父の相貌や、棚の罐の英国意匠は、折りにふれて雪の記憶から泛び出る。在世中はそんなこともなかったけれども、歿つてのち、紅茶の水色（みづいろ）を眺めると藤田の父が思われた。

「見た人の話は聞いてます。まア、しょうもないもんら

しおます。それと、あつ、というまにそこを離れないかん、何んせ人が多いさかいに、じつくり見物するわけにはいけませんのやて」

「しかし、話やと、しょうむない、いうことやないか。そんならじつくり見ることはない」

「御意。……それはそうと合同の踊ですけれど、御覧になりますか」

「ぜひに。……豆三さんが、これがすんだらくにへ帰るとも聞いてるし」

豆三は、新町大西席の芸子である。背丈があるのでずつと立役できたが、いつまで立方でもあるまい、といわれても、長唄も清元もさつぱり、もとより地歌は話にならぬ。その立役は、南地勝丸のようなケレン味のないだけ、すつきりと品がよいが、見方によれば、素直にすぎて押してくるものがない。しかし雪は、そういうところを採っていた。

「くには、長崎やかいうてたな」

「五島列島らしおます」

「何んという島です」

「五島列島、とより知りません」

「名アが知りたいな、島の」

「手紙でもお書きやすのか」

「手紙ですか……。郵便が届くと便利やな。まあ、所番地を訊いといて。何があるやしれへんさかい」

妙なことを言つたもの、と己れで知つた。他意はない。

長崎から出て成功した男がようやく老い、大阪を引揚げて故郷へ帰る。豆三は、そのせがれと所帯を持つ、と言つた。相手は高校の教師だともいうが、真偽さだまらぬところもある。希望、空想、が唇を洩れ、洩れたのを現実によつと、無理にも帰郷する例が、まつたくないのでもない。それであつたところが、当人の選択にはちがいない。

十五六で上阪して、およそ二十五年のあいだ新町に籍を置く豆三を、雪は章治の稽古場でしか知らぬ。

五島へ身を落着けて無事に暮らす、という噂が消息として確かなものになつたのち、何か送ろうという考えが泛んだ。祝い、というでなく、進物ともつかぬ、もつとさらりとした贈りもの。

「そうや。ついでに、誕生日も訊いといて」

「これは奇つ怪な仰せ……。承知しました。誕生日と所番地、ですな」

博覧会の花街の踊は、この土曜日日曜日二日間の三公演だと章治は言つた。

郭景色、桜の宵、雨の夕顔、雪柳、と演目がならび、『大阪おどり』の総踊で打出す。南地が在所帯、ついで北陽にも芸舞子は多い。新町は所帯が小さく、堀江は消えかかつている。

豆三が、どの演目のどんな役どころで出るのか、章治な

ら詳細を心得ているにちがいないが、じつは雪は、豆三がどのように華やかなこしらえで登場しよう、稽古の成果をあげて魅惑的な振りごとをくりひろげようと、さまで興味はない。が、いわば長年の功労者が、故郷へ引揚げる決心になったのが、よろこばしい結果に終るのを願う心に偽りは無い。雪は、現実の女が辛苦するのは好かぬのだった。

六

清元梅吉の始めた三味線音楽に「奏風楽」がある。べつに、もつと以前に、大倉喜七郎がひいきの演奏家に号令をかけてこしらえた「大和楽」は、舞踊の地としても迎えられている。

「奏風楽」は「大和楽」にくらべると、雪が聴いて叙事に長じる。梅吉は、奏風楽では松原奏風をなめる。いつであつたか、南地で古株の芸子がぼやいた。

「よくそれだけ詠れるもんだね、やなんてダメはいつもこれです。そんなこと言われたかて、わたしら生まれてこの方ずっと大阪で、ここを出たことあれしませんがもの」「言われっぱなしで退きさがるきみとも思われへんけれど」「そやさかいに、言いましたがな。『樽屋おせん』に材採つてやはるのやつたら、大阪言葉でどこに不都合がござ

いまつしやる。お師匠はんかて、義太夫語らしたら、だいぶ詠つてやはりまつせ、て」

と笑つた芸子も総勢百五十人のうち地方五十人余に含まれて演奏するうちには、奏風楽も出るらしい。連中は、ふだんは、長唄、清元、常磐津、などの稽古にあけられて、奏風楽などに身をいれはせぬ。

こんどの博覧会ほどの規模でなくとも、集まつて大きい出しものをしようとなると、何か書き物、こしらえものを頼む。それはたいてい、大茶屋が、日頃ひいきの小説家に委嘱するのが相場で、それへ三味線弾きがふしをつける段取りになる。そのふしづけを梅吉に頼むと、奏風楽になる。大人数の舞台は、立方の稽古が混雑する。そろつての稽古場は広い場所を手当てするが、そういう場所はおおむね所作台などはないことが多い。稽古場におよそ七日間は通うことになるが、毎回、足袋を捨てて、というのがまた、芸子の愚痴になる。激しい稽古に履きつぶすのではない、足袋の底が、どのように洗っても汚れが落ちぬのだ。捨て足袋も勿体ないが、そんなところで稽古するのが口惜しくもある。

博覧会の『大阪おどり』へは、東子と二人、つれだった。東子には、胡弓の会、五十日祭、と「三日にあげず」逢うことになった。座席を都合してくれた章治は裏で忙しが

っている。

たしか、キャバシティは八百五十、とやら聞いたが、立見が出て、ざっと千人は入っているよう。無料なのだ。むろん、博覧会への入場料は取っている。

豆三は大した役を与えられていず、終幕の総踊ではなおさらどこにいるやら見分けがつかぬ。

東子が花街の踊を好むのには、相応のわけがある。初めは雪が連れだして見せたのだったが、女の踊り手が男に扮して踊る、いうところの立役の、素踊で結ぶ後見結びなる帯型が、もともと芸子の始めたのが型になって今に行われる、と知りなどしてから、なおのこと見たがる。

総踊が切れるとすぐに外へ出た。何国人とも判じかねる外国の男女が、いたるところにうろうろしている。日本人が、この博覧会の開催期間中ほど、外国人を見たり接したりしたことはない。

「月の石が人気やそうです」

順番待ちの行列に並ぶか、というつもりで東子を見返した。東子は蚊耕の大島に紅型染の帯で、雨もよいの空を案じたが、曇天のままにすぎそうである。

「何も、特別に見たいものはあれしません……あ、皆さんの行きはるところ、どこでも、」

雪は千里の駅へ向うことにした。博覧会のために、地下鉄御堂筋線を延伸したこのあたりは地上を走り、同時に周

辺には、大規模な住宅団地もできている。

梅田で降りてタクシーへ手をあげた。

「富竹」にそう言つてあります」

大阪おどりだけ見物すれば、たいいてい東子は、帰ろう、というにちがいないと予想をしてきた。

「富竹」は鷺州の古い料理屋だが、もとは、浦江了徳院境内の茶店で、ここの蓮飯が、曾根崎あたりの色町から朝帰りする旦那衆によるこぼれた、と伝わる。慶応から明治の話で、茶店のころの富竹は、いま生きているたれも知らぬ。現在は、蓮飯の流れをひいて蓮尽しの料理を出す。

ちかごろ東子は、稽古を頼まれたり舞台上に買われたりするのがたび重なる。しかるに、報酬、謝礼、束脷というものを受けぬ。

これについては、新町の章治に入門のはじめから、東子は藤田の父に釘をさされていた。

……いずれそんなことになるやも知れぬけれども、月謝やの礼金やのはとらぬがよい、そんなものに枷をかけられては好きな道を好きには歩めぬ。入門は家族のたれもが好きなんだのを無理から自傷を通すのだから、好きな道を好きなままにおくためにもそうせよ。藤田の父は孫に言い聞かせ、一方、雪には、さきさき東子に代襲相続させるにしても大した額にもなるまい、あれのパトロネージはおまえに頼んだ、と、ほとんど命じた。

「ときに東子が変わった料理屋を知っているのは、たれかに招待されるからである。謝礼を押戻すと、かわりに、粗餐をさしあげたい、という申出がままある。しかしそれには東子の意思はないので、店の名や場所は、ぼんやりとか覚えていぬらしい。」

それでも東脩などを、強いて納めさせられることもたまにはある。それは雪が預り、雪の居間の袋棚にしまつてある。藤田の父との約束を反故にするようだが、熨斗袋のままでたさえ嵩の高いのが、堆く積まれてある。折りをみて東子を招び、整理せねばならぬ。

蓮根を刻んだり下ろしたりしたのをほかの材料と合わせ、煮たり焼いたり揚げたり、とさまざまな料理のあとに蓮飯が出た。栗めしの、栗の代りに蓮の実をたきこんだ、といううような、食つてみてどうということもない代物ではある。

「湖南省の産やとか聞きました、この実イ、」

「コナンシヨ、」

「支那の湖南省。年中出すのですよつて、干したのを買入れてますのや」

昼日中、というを憚つて二本だけにした銚子で、ほろりとよい気分になつてゐる。

「実イの時期で、菱やらといつしよですか」

東子は蓮の実を箸の先につまんだ。

「菱ですか。似たようなじぶんでしょうな。というて、

わたしも不案内ですけれど」

「食べたこと、ありますね、菱は。小さいころに。大和のみつちゃんの内で」

東子は、幼稚園を中途にして奈良へ疎開した。みつちゃん、とは、乳母の美津江をいう。東子は乳母とともに、乳母のさとへ厄介になつてゐた。嫂の時は手薄になつた淡路町に残り、藤田の父母に仕えた。

「村にお豆腐屋があつて、そのまをずつと行くと、何んや古そうな池に突当ります。そこへ、鹽みたいな舟を泛べて、みつちゃんとこのおじいちゃんが菱を採つてくれたのです、水草の中から」

「茹でて召上がりしましたが、炒つて、でしたか」

「さあ、どうでしたやろ。香ばしいて、おいしかったのは憶えてますけれど」

「ふうん。楽しい暮し、してはったんや」

「けど、あつちが大阪の方角や、て教えてもろて、夕方になると、二階の窓から西のほう向いて、毎日、泣いてました。外で遊んでたら、B29が飛んできて、慌てて、トマト畑に隠れたりもしました。上からは丸見えやつたやろに」大阪恋しさに夕映えの山に向う、東子の泣き顔が泛んだ。「お豆腐は、木綿ばかりで、それがまた、固いのです」それから東子はふいに、手ぬぐいを註文する、と言つた。雪は、追憶の糸をぶつりと断ち切られた。

「ほんまは、今年から、と思てましたけれど」

「今年から、とは」

「新しい手ぬぐいです」

「まだお持ちですよやろ、まゑに誂えはったの」

「そうやあれしません」

新しい図柄を案ぜよ、と言う。

来春東子が朝日座で踊るのは章治の藤間良佑の会で、新規に手ぬぐいをこしらえねばならぬものでもない。舞台から撒くような演目でもなさそうだから、楽屋への見舞客には、手持ちを配ればすむ。

「頼まれてください」

箸を置いてかたちをあらためる。

「……図案ですか」

いま使っているのは、藤ノ丸散らしを二色で染めてある、手ぬぐい屋『松利』の文様帖から選んだのだ。

「あれではいけませんか」

「すぎさんの手ぬぐいがほしいのです」

面を伏せて言った。以前は、こういう無理をいうときは、雪にじつと眸を当てたものだが、一見遠慮そうに見えるのは、年齢相応の経験を積んだゆえであろうか。

図案は得手でない、などという逃げの手は東子にはとおらぬ。絵を描いたり、図案を考えたり、は子供じぶんから好きだった。げんに、小学生の東子の、夏休みの課題の

絵を手伝いもした。

大阪千里の万国博覧会で、世間が浮ついて騒がしい。そのために、雪の会計事務所は逆に時間に余裕ができた。日曜日は込む、というので、事務員二人には好みの日二日間の「見学」を許可した。多も雪も、それにあわせて休暇をとろう、と申合わせた。つまり、ひまができたのである。そこへ図案の註文は、じつは、うれしくもありがたい。

が、そうは言わなかった。図案持込みは出来合いの文様で註文するより割高になるが、もとよりそれが理由ではない。章治の良佑は、いまさら手ぬぐいは撒きもせず、手元にその用意はない。気が向けば、舞台姿をテレホンカードにして、ひいきや欲しがる門人にくれてやる。

ひとつには、その師匠をさしおいて弟子たるものが仰山なまねをしてよいものか、と思い、また、先輩朋輩のてまえさした振舞いではないか、などと、こと東子に関われずにわかに慎重になる。周辺の些事が東子の踊の障りになるのを防ごうと、慎重がすぎて臆病に傾くやもしれぬ。

「考えまひよか、文様」

雪の図案に東子の名が染め抜かれるとは、これは快哉を叫ばねばならぬ。

「章ちゃんに、一言ことわつたほうがよくない」
たかが手ぬぐいでつむじを曲げる章治でないと承知でも、

東子一人が門人ではない。折り目をつけるのは東子の礼であり、それをすすめるのが雪の立場だ。

料理が出尽くすと、亭主の北村が挨拶に出た。何代かのあとを継いだので、雪より若い。手づから焙茶をすすめ、当然のごとく博覧会の話におよぶ。

「もうおいでになりましたか」

「出かけた、いいいますか、きようはその戻りにこちらへ」

「えらい人出でございましたやろ。やつぱり、だいぶお並びになりましたか」

「いや、並ぶ、ということはない」

「はあ。すると、木戸御免で、」

「御冗談を。パビリオン、というのですか、どこも見すじまいです。知った子が出ましたので、ちよつとボールの踊だけ。北村さんは、御興味がおありですか、ああいうのに」

定休日に二三度は見物に出るつもりだ、と北村は言つた。それから、杓ぬぎに庭下駄をそろえ、兩人を見返つた。

富竹の庭には芭蕉の句碑がある。名月や池をめぐりて、の句が彫つてあるのは円柱型の手洗鉢だから、句碑というよりは句碕と呼ぶのがよいやもしれぬ。

東子は早速に庭へ降りた。雪は、どつちでもよかつたが、玄関に置いたステッキを回されたので、あとへつづいた。

句は梅室の書で、裏に、

天保甲辰桂秋建

とあり、つづけて、素屋以下四人の名が記してある。芭蕉百五十年忌の顕彰であらう。

雪は、からかうつもりで、「桂秋」の意味するところを問うてみた。

「八月、のこと。ちがいましたかしらん。何の曲やつたかにありました。置き浄瑠璃で、むつかしい言葉が、よう出てきますやん」

「ほほう、そういうことですか。……東子ちゃん、一番、気張りまひよか、手ぬぐい」

何やら東子がいじらしく胸へきたのだ。

七

京町堀へ帰りつき老松の勝手口をはいると、岡野四郎が来ている、という。

春に娘の結婚式で来阪して、日が経っているか、まだ間もないか、いずれにせよ、業務のついでにはちがいあるまいけれども、よく来てくれた。

老松は、明日は日曜日で定休だが、土曜のきょうも、予約がないので休みにしたようだ。

雪の帰宅を聞きつけて、二階から四郎が降りてきた。背広の上着をふら下げている。

「お帰り。二階を貸切りにしてた。おまえ待ち待ち蚊帳の外、」

「蚊に食われたか」

「うまいものを食つてた。お酒も少々いたいただきました」
兩人は雪の居間に腰を落着けた。座布団は、六月にはいるとすぐに近江縮に換えてある。

「お酒、運ばせよか」

「いや、たくさんだ。あんまり評判を下げるからぬ」
雪は四郎の上着をハンガーへかけると、その場でお召しの単衣に着更えた。外へはもう、誠に着ては出かけぬようになつたが、事務所を開設してからはなお、内では着物でいることが多い。藤田の父の「おすべり」が季節ごとに揃っているのが、ものによつては、袖付けの肩へ足し布をして裾を少々出すだけで身丈に合う。

「そうや、」

雪は思いついた。四郎の背丈は、測れば雪にほんの五分足らぬけれども、着物なら貸し借りがなる寸法だ。このあいだ母は、幅広の浴衣地を三反ばかり需め、柄が気に入ればすぐにでも縫いにかかろう、と言つていた。とりまぎれてまだ見ていぬが、母の見立てならまちがいはあるまい。その一反を四郎に遣らう。

「きみ、浴衣くらいは着るやろ」

「浴衣か。そうさなあ、ひと夏に二三度も着るかなあ」

「二三度か。まあ、ええやろ」

東京の遊び人は、ことさら幅狭に仕立てたのを意気がつて身に着けると聞く。七五三分増し、などというのがそれで、七五三分は、後ろ幅、前幅、衽幅の寸法をいう。つまり、それぞれ、七寸五分、五寸五分、三寸五分、に仕立てるのである。浴衣なんどはこれに当てはまらぬし、四郎は歴とした堅気の男だ。

てんぶら揚げ方の千枝がビールをささげてあらわれたので、浴衣地を見せてくれるように頼んだ。

四郎は、重ね井筒を詰めて染めたのを選び出した。ほかの二反は、結びかりがねと松皮菱文である。結びかりがねのほうは章治に譲るつもりにした。良佑の流儀は藤間勘右衛門派だが、門人にも、流儀の浴衣を強いることはない。祝儀用に流儀の紋服を誂えさせているから、そのうえは無用、ときめている。

「こつちには、いつまでいられる」

「火曜日に帰る。午後だな。午前中いっぱい、いるよ。それまでに万博へ行かなきゃならない」

「そんなら、あさつての月曜に、鯉でも食べにいこか」

「鯉か」

「好きやろ」

「好きにはちがいないが、月曜はドイツ館を覗いてこようと思つて。接待する相手もあるし、どうやら一日がつ

ぶれそうだ」

「あしたでもええ。日曜や」

「日曜は、本社の連中と、各企業館を見てまわる予定になつてる。折角だが、鯉を食う時間はとれない。雪の顔が拝めたんで、満足してる。いずれひまをみつめて、鯉でも何ンでもお供するよ」

「いや、」

雪は、俺が鯉を食いたいというのでもない、と胸の内につぶやいた。

あたりまえに見物するなら、とてもすらすらは運ぶまい。やつぱり木戸御免か、と富竹の北村のように聞くと、

「木戸御免はおかしいが、そんな日が設けてあったのはたしかだ。開場の一日まえだったかしらん。それに行きはぐれたんだから、皆さんと同じに並びますよ」

「そら無理や。じつは、さつき戻ってきたのが、博覧会からです。えらい人出や、やめたほうがええ」

「へええ。さすがのきみもでかけたのか。ドイツ館はどんな工合だった」

「いや、何館も見てへん。ちよつと義理づくに、ホールの踊を見ただけで」

「義理づく、か。ぼくだって、ドイツ館を覗きたい、というのは、それだ。もう先、あつちへ出張したことがあつたらう、その繋がりだね」

四郎の帰国まぎわに、出張所の社員が服毒自殺した。家族を日本に残して赴任し、岡野四郎を各地へ案内していた男だ。赴任期間も残りわずかになり、べつな社員と入れ替りに日本へ呼び戻そう、という折りの、四郎にとっては不始末と判断されかねぬ事態だった。

あのときは、帰りの機内に乗り合わせた日本人に、三栄銀行ロンドン支店の行員が建物の屋上から飛び下り自殺をした、と耳打ちされなどもしたらしい。中之島の本社へ報告をすませ、雪のところへ顔を見せに寄ったときには、あんまり記憶にないような憔悴ぶりだった。それでも四郎は、ドイツ見聞譚を明朗に披露したものだ。

さつき着更えて、ポケットの中身はみな乱れ箱へ移した。そこに、博覧会場の案内図もまじっている。雪は四つにたたんだ図を四郎の前へひろげた。ドイツ館の位置は、図の手前のほう、フランスの西隣に示されてある。

予定の詰まっているらしい四郎が、雪の居間を宿に、泊っていくのが自明の理、と考えていたのではない。そのくせ、服部卓四郎の『大東亜戦争全史』について、語り合おうと思つていた。場としては、兩人蒲団へよこたわつて、というのがふさわしい。よく上梓したもの、と半ば呆れつつも、四郎の勧めにしたがい、一応読み了えた。わかつているつもりの四郎の考えを、確かめようとも思つて

いた。

雪はその自序の一節を思い起した。

……大東亜戦争は、正しく日本の悲劇であつた。戦死者二百六十万、戦傷病約十五万、さらにそれに幾倍する遺家族に思いを致せば悲痛の極みである。しかしそれなればこそ尚更に、悲愁を超え、素裸になつて、この戦争史と取組まねばならぬと意を決したのである。……云々。

服部が「悲痛の極み」としてあげる死者の数には、米軍の爆撃によつて死を与えられた非軍人の計上はない。多春洋の留守宅家族の難も、むろん勘定にはいらぬ。

服部はGHQから高給を取りつつ、かつての参謀などを呼出し、「事情聴取」したにちがいない。その際、聴取の内容を取捨選択、あるいは隠蔽秘匿する余地はなかつたか。GHQに阿る記述にならなんだ、とは、どうも断言しにくい。

雪は履きなれた^し靴下駄にステッキを持つて玄関を出、西の空を見上げた。

「おい、傘、」

を持つて行け、と言いかけたのをやめた。少々の雨ではなるたけ傘は差さぬのが、四郎の流儀だ。雪も同様なのは、皆行社の小学校以来だから年期が入っている。しかも、げんざい、降っているでもない。雨を厭うなら車を拾うまでのことか。

岡野四郎は、肩幅の広いうしろ姿を見せて雪のまえを去る。

月曜日の事務所は、半日が無事にすぎた。

ひる休みになると、多春洋が雪の机の脇へまわりこみ、ちよつとお話が、と軀をかたむけた。

「何んです」

多は口を緘して一步退いた。

「出まひよか」

雪が言うのと、先へ立つて階段を降りる。この場合、やはり隣のグリルにはいることになる。

直截に言おうとしたり、もつてまわつたり、しながら、多の話は十五六分もつづいたか。もつとも、例の、シシカバの載つた、サッテライスを喰いながら、ではある。

話は、要するに、担当する企業の株で予想をうわまわる利を得たが、不都合が否か、というのである。担当であるうとなかろうと、上場された株式の株の売買は自慢である。ただし、世間に流布報告される以前に、企業の内情は会計士ないしは計理士の手の内にあるから、それを持ち駒に指して出て勝ちをもとめるなら、その指し手は避難中傷の的になろう。

「悪うしたら、犯罪でつせ。手工がうしろへまわります」
藤田の父の手元にも何社かの株はあつたが、利食いを生活の資にしていたのではない。売り抜けはせず、じつとそ

のまま持っていた。株主募集に応じて資金の提供をする、その義をそのままだった。多がわざわざ明かすからには、面白からぬ状況、との自覚があるのだ。

「お金、が要りましたんですか」

長年月と大枚の研究費とをつぎこんだ新製品を、いよいよ世に送り出そうという少々まえに、それと察知して証券会社の客になり、新聞紙経済面に「ニュース記事が載るとすぐさま、再度、手数料を稼がせた。

「『^{はなれ}増殖業』ですか」

「……お察しでしたか」

多は紙ナプキンで口辺を拭き、コップの水を飲んだ。

「察しはしません。そんなこと、まるきり頭にあれしませんでした」

「……後始末は、どのようにしましたら」

神妙だが、皿はきれいになっている。いや、どんなときにも、食うものは食うのがよい。

「いちいち報告することはないのやありませんか。但し、しはったことが法に問われたときには、潔うあそばすこと。わたしが参考事項の聴取を受けるような場合は、承知してる事情は、みな、話しますけれど、よろしゅうございますな」

雪は、口を封じておけ、と言ったのである。思いがけずもいっぱしの悪人になった気がした。それで思い出した。

遠い昔、東子に言われた。……すぎさんて、悪人やわ。

東子は、当時、たしか新制中学生だった。母は、まだ新町で茶屋『ふち田』の軒灯をあげていた。章治の稽古場へ通うついでに、雪の居間へ、東子はときおり姿を見せた。稽古場を西へ、白髪橋の方へ五六分も行けばふち田の木戸が見える。

わが庭のようにやつてくる隣家の猫の相手になり、雪の淹れた紅茶を嗅み、などして帰ってゆくのだったが、悪人と指弾されても、雪には何んのことやらさっぱり理解は届かなかった。

とき経て考えると、東子は雪の振舞を、擲楡、翻弄、と解していたのやも知れぬと慮る。振舞、というほど動かなかったのも、非難されるところになったらしい。あの年頃は、対象が己れの思わくをはずれると、その罪を対象にもとめることがままあるらしい。そんな機微は、雪の心得になかった。それに、何をいうにも東子は中学生だった。

「なるだけ御迷惑はかからんようにします。性に合わんことをしてしましまして、いっぺんで懲りました」

多春洋は頭を下げたが、司直の手がはいったというではない。それを「懲りた」と後悔するのは、畢竟善人なのであろう。聞かずとも、多の金の行方には察しがつく。神田一子という、花木流をとびだして一派を樹てた女へ、いき

がかりの上からも、援助せずにはおさまるまいからである。一子と花木の家元とのゆくたては、多に請われてその場に立会い、直かにこの眼で見て知っている。一子が流派を出たいきさつは、べつに章治を通じて耳へはいった。

多は、雪が開いた会計事務所に席をおくまでは、叔父の持物の画廊をまかされていた。半分は隠居仕事のようなもので、知合いの事業所の經理を見たり、弓道場で弓を引いたり、撞球場で遊んだり、という毎日だった模様である。敗戦後すぐに計理士の資格を取りながら、まともにはそれを生かさず、叔父の飼ひ殺しになっていた。

藤田の父の社の世話になり、微温の湯に浸かっていた雪は、考えをあらためて会計士資格取得に励んだのだったが、事情はどうやら多春洋に似通うように思われた。雪も、敗戦後の一時期、ビリヤードに通ひ詰めたことがある。弓は、休み休みだが今も引く。多は、弓の知合いの紹介で、雪の事務所へ来たのだった。

多は、敗戦間近の空襲で一家全滅したあとへ帰国し、そののち再縁をもとめずにいるけれども、雪は一度も娶ったことはない。いずれにせよ、多春洋は、たれと再婚しようが、どこから故障のはいるいわれはない。神田一子も独身である。さつさと一緒になってしまえば、不明朗な金に手を出さずとも、天下晴れた兩人になら、春洋の叔父という人も助力を借しまぬのではあるまいか。

かの叔父は、本業が材木商である。それも戦前からの。住之江の木場へでかけて叔父に会い、ひとくち口を利かぬでもなかった、と思うと、花木の家元との悶着の場には立会わせておきながら、大いに関わりのあるこんな話を、こゝとが終つてから明かしたのが忌々しい。会計事務所長は炭木雪だが、雪には多春洋を管理監督するつもりはない。そんな力は雪になく、多も一個の計理士である。

雪はにわかに東子の顔が見たくなった。四郎に袖にされ、多には勝手なまねをされた腹癒せ、やもしれぬ、と己れの肚をさくつて苦笑した。

多は事務所に戻る。雪は、用を言立てて多を見送り、またグリルへあと戻りした。

八

雪は紙片の電話番号をグリル会計係の少女にしめした。少女の声で夙川の東子を出してもらおう、というのだ。藤田には嫂がいる。嫂の時子が出た電話口へ、東子と呼ぶのは気がひける。度重なるのである。

待合わせの約束のあと、その場で料理屋へ電話した。少々待たされ、承りました、お待ちいたしております、との返答で予約ができた。

事務所へ戻ると、多の姿がない。契約先へでかけた、と

いう。気分を入替えて、妙な株に手を出すまえの多にかえつてくれれば、それでよい。

東子は先へ来て待つていた。待合せ場所の茶房へは雪のほうがつつと近いので、油断していたらしい。そこはさつさと立ち、タクシーを拾った。東子は白場の多い塩沢を着てきた。あとからのほうが乗り降りしやすい。雪は先へ乗り込んだ。

運転席へ、

「上九の『津川』……上九の警察病院まで頼みます」

と命じてから、

「鱧でもたべまひよか」

「鱧ですか」

「お好きですやろ、鱧」

四郎にもおなじことを言つた。

天王寺の南東、真法院町に古くからの料理屋がある。

雪は、母の小唄の会にさそわれて二十番ほどを聞き、そのあとの宴につらなつたのが暖簾のくぐりぞめ、名物は沖すぎだが、そんなものでなくとも膳の肴はどれも嫌みがない。仲居の行儀もよい。まんなかをはずれた場所にあるせいで、静かなことは申しぶんない。客の大方は、料理はつけたりでその閑雅をもとめるのやもしれぬ。

「鱧は、まだちょっと早いことあれしませんか」

東子の言つたのは、タクシーが上本町六丁目を南へすぎてからだ。互いに沈黙が窮屈だった。

「そうですね。梅雨の水を吸うて味が乗る、いいですね」

入梅の報はあつたが、連日雨、というのでもない。ここ数日は曇天がつづく。

『津川』の下足番は、さすがに商売柄で雪を憶えていた。もつとも、ステッキ携行の男はあんまりないから、そういうことからの記憶やもしれぬ。

あまり広い部屋でも困ると案じていたが、ころあいの座敷に通された。

略式の床の、花は、宗全籠に矢筈芒と秋海棠が取合せていれてある。雪が籠の名を知っているのは、東子の母の時子から得た知識だ。藤田の父は、子を残されて寡婦になり舅夫婦に仕えてきた時子に、茶室を建てて報いた。十四五年まえ、淡路町を引払つて夙川へ転宅したときのことである。

現在茶室は、水屋をふくめて板を張られ、東子の稽古舞台に変じている。時子の茶は、もっぱら外での稽古になる。

「嫂さんは、機嫌ようなさつてますか」

雪は、左右どっちでもよいことを訊いた。それと察してか、東子は微笑を泛べて黙っている。少女の声をたのんで呼出したのが、いまだに面目ないような気持にさせた。

「東子ちゃん、おとなになりはった」

「そら……三十ですもん」

そんなことは百も承知だ。輪郭をくつきりと出して、少々目が吊るくらいに髪を一束にひきつめた東子の顔を、わずかに見た。兩人は鉤の手に坐っている。

「わたし、早よ三十になりたかったんです。それが、なつてみたら、」

仲居が来て、鍋の支度にとりかかる。雪のつもりでは、鰻の取合わせには玉葱だけだったが、

「早松茸がはいっておりますので」

と、小振りの松茸四五本をしめす。

早松茸などは雪の好みではない。死にかけならべつ、心身すこやかなうちは、時々のをよろこんで食いたい、と思う。が、

「松茸があるなら玉葱無しがよかったですかしらん」

と言ったのもうそではない。

「玉葱は、泉南のものでございますから」

料理屋でなくとも玉葱の泉南産はあたりまえだったが、いつからか淡路島から大量に運ばれるらしい。淡路島のは「薄皮を張ったようで、口当たりもお味もいま一つ、と仰有います」

仲居は言った。そのつづぎに、よろしくお願いいたします、と当然のごとく東子へ目を遣うので、雪はあわてて

「あとまかせてください」

とひきとり、仲居の低頭した影が一本引きの唐紙にさえざられるのを看守った。

三十になつてみたらどうなのか、あとを聞かねばならぬとりあえず、出しをひとすくい鉢へ取り、味を見た。それから先ず東子の小鉢へ、鰻をよそい、玉葱と松茸をあしらった。

「玉葱が、何ンともいえん、ええお味……わたし、お鍋は、どなたとも、食べたことあれしません。内はべつですけれど」

「お厭でしたか、鰻鍋は」

「そんなこと、言つてしません。お鍋は、すぎさんとかいただけへん、言つてます」

雪は両方の盃へ銚子を傾けた。バア絃の以登太夫の話でも、東子はまず呑める口だ。

「今晚はちよつとすごしてもかめしませんか。素面（すめ）でいてたら、何するやれしませんが」

言いながら雪は、似たようなことをまえに口走つたのに思い当たった。

住之江の『膳飯屋』……とは言い条、気の利いた酒肴を出す家だったが、一夕、多春洋に連れられた。氣に入つた雪は、つぎに東子と章治とを伴った。つい唇を洩れたのはその折りの、章治の前で、である。……あんまり呑ま

んという、何するやわかれへんよって、と言ったような気がする。出た言葉は正反対でも、内容は一つである。

と、東子がついと起つて唐紙を出た。手洗か、と合点しつつ、そんなことはなさそうにも思う。

東子は子供のじぶんから、かたいほうだった。小学校の遠足でも、出先で用を足すことはせぬようだった。そのかわり、夕景に戻つてくると、手洗へかけこんだものだ。

酒を口へふくみ、鍋へ箸を動かし、しながら待ったが、東子は容易に現れぬ。

唐紙がすべったので目を上げると、東子ではなく仲居でもなく、女将が、そのまま雪のまえへ来て、顔を寄せた。

「……わたくしのお役に立てていただけませんで、どうしても、京町堀へ使いを出してくれ、と仰有います」

雪は万事承知して電話室にはいった。

電話には母が出た。手短に要領をつたえ、さて、たれに頼もうか思案するまえに、岡野が来ている、という。

四郎なら、一昨日、博覧会場で大阪おどりを見物して戻った内に、まえぶれなしに訪れて待っていた。ちよつと話ただけで早くも、帰る、というので、火曜日まで大阪にとどまるのなら、體でも食おう、月曜の晩に、と誘うと、月曜は無理だ、との返答だったではないか。

何にもせよ、よいところへ、と雪は思った。四郎を電話口と呼ぶと、すぐに言った。

「お母ちゃんに荷物こしらえてもろてる。それを持って、タクシーに乗ってくれ。ともかく警察病院を目当てに来てくれ、上本町九丁目の。そこから真法院町へはいった『津川』という家や。警察病院の向いの家」

京町堀からは南へ一旦信濃橋へ、それから東へ折れて農人橋で高速道路にはいる。南下して夕陽ヶ丘で下の道へ降りたら上九まではわずかだ。頭の中で道中を辿ると気がせいたが、四郎の到着は案外に早かった。

女将みずからが玄関に待構えていて、東子の羞恥が最小限ですむように取計らつてくれた。

そのあいだ雪はもとの座敷にいて、「殊勲甲」の四郎の相手をした。煮詰まった鍋はとりのけ、四郎のために牡丹鱧の腕を誂えた。晩飯はまだ、というので、それだけではたよらない。鱧ちりを、梅肉ではなく、割醬油に山葵で食え、とすすめた。小鉢に、さみどりの色あざやかな、和えものが出た。一見して莢型は、花の蕾である、ごく小さな百合の花の蕾のような。

「何かの蕾、ですか」

「とぞんじますが、……訊いてまいります」

それには及ばぬ、ととどめたが、仲居は厨房を往復し「日光黄管の蕾、やそうにございます。あの、金針菜、と申しますそうで」

と教えた。

「はあ。金針菜なら、支那で食べたな」

四郎に同意をもとめたが、不審顔だ。

「食ったか」

「食べたやないか。もつとも、乾物を戻したのやさかい、

薄茶色の、豚肉と炒合わせたもんやったけれど」

その薄茶色を、金針、といったのだ。

「ふうん。日光黄筍なんてものが、支那にあったか」

「それは、きみ、甘草とか藪甘草とか、そんなもんやろ。

花は似てる」

問答のうちに東子は津川を出た。その知らせを女将が直かにもたらした。雪は安堵して、三味線拝借、と言った。

「何か聞かそ」

「うむ。しんみりとやつてくれ」

この日頃、『露は尾花』などという端唄が雪の心に添う。露は尾花と寝たという、尾花は露と寝ぬという、アレ寝た

という寝ぬという、尾花が穂に出てあらわれた……と、ば

かばかしいような詞章だが、ばかばかしい、といえは、

庭の石竹引抜きにくい、庭の石竹引抜きにくいトサ

と、早口言葉のような文句の唄も、ゆつくりと弾き歌い

にすると、その、何んでもないところが、しみじみと、味

合深く聞けるのである。

四郎とともに京町堀へ帰りついてしばらくすると、東子

が電話をかけてきた。

「……勝手にいたしました」

「うむ、」

「……かんにんしてください」

「いや。お風呂へでもはいつて、ゆつくりおやすみ」

「あの、五六日したら、また、」

五六日、というのに意味を持たせている。

「逢いまひよ。逢うとくれやす」

雪はわれから発熱したように応じた。四郎が聞いていでもしたら、とても言えぬせりふだが、かまわぬ、という気になつていた。

四郎とは、二階に蒲団をのべて枕をならべた。

揚げ方の千枝が、休業でも折々に顔を見せて、昔馴染みの母を手伝い、話相手になり、して帰るのだったが、津川から電話をしたとき、千枝はいたのだろうか。四郎がいる

と聞いて千枝の不在は尋ねもしなかった。母に走つても

らいもならぬから、結句千枝の手を煩わす。それでは東子

は、このさき顔を合わせにくかったところだ。まったく、

よくぞ四郎は来てくれた。

「じつさい、助かった」

隣の枕へ、というではなく、つくづくと洩らした。四郎は、盛りつぶされたあんばいに、湯殿を出るとじきに寝に就いた。持たされて津川へ駆けつけた、風呂敷包みの中身

について問わず、どうやら察していたらしい、東子の行方も訊かずにしまった。

津川の女将をあいだに立てての話では、予期せぬことで肌着を汚した、というのだった。さいわい単衣の季節で裏地を汚すことはなかったが、それでも、透るのは透り、背縫の縫い代にまでその印はついていた。袖だから、縫い代だけ摘み洗いをし、アイロンをかけよう、とすすめたのを東子は固辞した。長居をしたくなかったのだ。

女将によれば、よくあること、らしい。およそは予想していても、外れるときもある、と言った。何かが刺戟になって、その到来を早めることもありそうに思われ、そうではなくとも、心身は有機的に関連している。

「有機的に、ですか」

「イヤ、えらそうなこと申上げてしまいました」
女将は、役目を果たして柔らかに笑んだ。

雪と同座するのが東子の「刺戟」になったとすれば、それはそれで些かよろこばしいのである。それよりも、胸が騒いで、すぐにでも東子の顔が見たくなった。

雪は、すっかり寝入った四郎の面に、想い人へ与えるような視線を投げた。

ドイツ館では旧知のドイツ人に会い、その解説で館内を見て回ったあと、数人を外へつれだして接待したという。

もう少しゆっくりするつもりでいたところ、どこやらの元首御入来の時刻が迫った、とのことで、はからずも四郎の躰があいた。

もともと昼食だったからまだ日は高い。皆と一緒にもう一度会場へ戻り、奥のほうの館を見物した。ドイツ連邦共和国館からは離れた、イギリス、チエコスロバキア、ブラジル館などである。イギリスだけは、どういうわけか、「英国」、と漢字で表示してある。

ドイツ館は半球形を伏せたドーム型で、展示物はすべて地下にある。螺旋状の回廊をつたって地下へ降りる道では、円周部の芝生に仕込んだスピーカーからたえず音楽が聞こえてくる。鏡面の壁には己れの姿が映る。

「あんまりうれしくなかったね、四六の慕じやないんだから。あわてて顔を背けましたよ」

作曲家のストックハウゼンが姿を見せ、集まった客に挨拶したのが英語だった、と四郎は言った。

「ドイツ人が英語を使っただから、愛想というか、サービスでもしたつもりだろう」

豆三らのおおどりはきのうでしまいである。道頓堀の橋の上で、迎えるバスに乗込むことも、もうない。

ドイツ館を、東子と見物しようか。いずれ東子も、鏡に映じるそれぞれの姿に笑い興じる気持になるであらう。